

令和 5 年 6 月 8 日現在

機関番号：32686

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2022

課題番号：20K22027

研究課題名（和文）仮設建造物の歴史－19・20世紀ドイツにおけるバラック（木造仮設建造物）を例に

研究課題名（英文）History of temporary buildings - Barrack in Germany in the 19th and 20th century

研究代表者

梅原 秀元 (Umehara, Hideharu)

立教大学・文学部・特任准教授

研究者番号：00840117

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：新型コロナの影響で史料調査の時期が大幅に遅れ、調査を1回しかできず、負の影響を受けた。

その中でも、2022年度のフライブルク市および同市があるバーデン地方での史料調査から、第一次世界大戦期のドイツで木造バラックが、野戦病院、倉庫や兵舎など様々な用途で利用されていたことを確認した。次に、戦後、バラックが廃棄、売却、別目的での再利用されていたことも確認し、そうしたことは第二次世界大戦後でもフライブルク市の例からうかがえた。さらに第一次大戦当時のドイツ軍が採用していたバラックメーカーについての史資料も収集でき、木造バラックについて経済史的な観点から研究するための起点も作ることもできた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

戦争や災害時に設置される仮設建造物の歴史を、第一次世界大戦期のドイツの一都市と一地方における木造仮設建造物（バラック）を例に調査するもので、これをテーマにした研究はこれまでなく、研究上の空白を埋めている。バラック設置の背景、用途、利用、使用後の処理・処分について直接・間接に関係する史資料調査を通じて、バラック自体の歴史とともにバラックを通じた対象時期・地域の歴史研究に寄与できる。さらに、現代の仮設建造物と、それが設置されざるを得ない状況がもつ問題点について考える場を歴史的事例から提供するという現在の社会にとっての意義もある。

研究成果の概要（英文）：Due to the influence of the COVID-19, the period for archival research in Germany was significantly delayed, and the research was conducted only once. The research project was influenced by the pandemic very negatively.

Nevertheless, from the archival research conducted in Freiburg i. Br. and the Baden region in the fiscal year 2022, it was confirmed that wooden barracks were utilized for various purposes such as field hospitals, warehouses, and barracks during the First World War in Germany. Furthermore, it was also confirmed that after the war, the barracks were either disposed of, sold, or repurposed, a trend that could be observed even in Freiburg after the Second World War. Additionally, historical materials regarding the barracks manufacturers employed by the German army during the First World War were collected, establishing a starting point for studying wooden barracks from an economic historical perspective.

研究分野：ドイツ近現代史、医学史

キーワード：ドイツ近現代史 第一世界大戦史 病院史 建築史 戦争の社会史

## 1. 研究開始当初の背景

本研究プロジェクトの代表者(以下、筆者とする)は、近現代ドイツの医学史を専門にしており、近年は、第一次世界大戦期の医学についての研究を進めている。その過程で、野戦病院についての史料や研究を目にすることが多く、最前線での医療の状況を知るために、臨時の救護所や野戦病院のためにどんな建物を使っていたのかに関心を持った。さらに、筆者が10年ほど前に中国の青島(チンタオ)の医療衛生史についての研究をしていたときにたまたま見た、1897年にドイツ帝国海軍が統治に先駆けて設置した臨時海軍病院も、バラックによるものだった。こうしたいくつかの経験から、戦争や植民地支配のごく初期段階、さらには災害時といった、普段とは大きく状況が違う時において、仮設建造物が果たす役割が大きく、しかし、その役割に比して歴史研究の対象になってさえないことに筆者は気が付いた。そこで、仮設建造物、その中でも筆者がこれまでの研究活動でしばしば目にしてきた木造バラックに焦点を当てて、歴史研究のプロジェクトとすることにした。筆者のこれまでの専門および研究領域から、第一次世界大戦時のドイツにおける木造バラック、とくに軍陣医学や戦時における医療にかかわるものを中心に調べることにした。ドイツにおいても、こうした視点での研究はなされていない。そして、大戦中に、木造バラックがなぜ利用、それも大量に利用されたのか、利用されたのちにはどのような経過をたどって、最終的には廃棄されたのか、いわばバラックの一生をたどることで、この時期のドイツの社会のありようにも接近できるのではないかと考えた。

さらに、木造バラックにはいくつかのモデルがあり、そのモデルをつくっているメーカーも存在した。これらのメーカーは特許(特許)を取っていることも多かった。こうした点からは、木造建築と、特許、木造建築業の経済史・経営史・企業史といった研究への展望を見出すことも期待できた。

こうした背景から、筆者は、この研究プロジェクトを始めることとした。

## 2. 研究の目的

1 で述べたように、このテーマでの先行研究は、日本はもとよりドイツをはじめとする欧米でも全くないと言っていい。したがって、まずは、どのような研究アプローチが可能であるか、また、対象とする時期における木造バラックにかかわる未刊行・刊行史料がどの程度存在しているのかを調査することが必要であった。まったくなければ、研究を進めることが難しいからである。したがって、本プロジェクトは、第一次世界大戦期を中心にドイツにおける木造バラックに直接・間接に関係する未刊行・刊行史料の所在の調査及び収集と、木造バラックの歴史研究をどのように行っていくかについての考察を行うことを目的とした。

## 3. 研究の方法

2 の目的のために、関係する研究文献による調査と、インターネットを利用して、デジタル化されている史料の収集、そして未刊行史料についてのドイツの文書館および図書館における所蔵確認および史料へのアクセスについて調べた。後者は、実際にドイツの文書館や大学図書館を訪れて調査するための事前準備に相当する。

ドイツでの調査では、大学図書館については、デュッセルドルフ大学医学部医学史学科の協力で同大所蔵の資料および他大所蔵資料(ILL)の確認・収集を行うこととした。文書館での調査については、西部戦線に近く、傷病兵が多く運び込まれたと思われるバーデン地方および大学医学部があったフライブルク市に重点を置いて未刊行史料の調査を行うこととした。調査対象の文書館は、ドイツ連邦軍文書館、フライブルク市立文書館、フライブルク州立文書館、カールスルーエ州立文書館とした。

## 4. 研究成果

新型コロナウイルスの世界的流行と本プロジェクトの期間が重なってしまったため、ドイツでの史料調査の時期が、想定していたより大幅にずれ込んでしまい、調査の過程で収集した史料の内容の精査および評価といった作業も大幅にずれこんだ。それでも、フライブルク市、およびバーデン地方のバラックについての史料が、フライブルク市の諸文書館およびカールスルーエ市の州立公文書館での調査で一定程度収集されたこと、デュッセルドルフ大学での調査で対象時期とする第一次世界大戦期の医療衛生史の基礎資料であるドイツ陸軍による衛生報告(1934年)、ドイツ陸軍が使用していたバラックの企業についての資料などの刊行資料を写真撮影などにより収集できた。

このうち、後者については、ドイツ陸軍の衛生報告(全3巻)は、戦時中(1914年8月から1918年11月)の陸軍の各軍ごとの衛生状況を示すとともに、各種の統計なども含まれていて、第一次世界大戦期のドイツ側の医療衛生史研究では、1921年刊行の『八

ンドブック『第一次世界大戦期における医師の経験』(全9巻)(*Handbuch der ärztlichen Erfahrungen im Weltkrieg 1914-1918*, 9. Bde.)と並んで、基礎的な資料である。しかし、日本の研究機関での所蔵が確認できず(持っているところがあるかもしれないが、少なくとも一般の研究者がアクセスできる状態にはない)、ドイツに行くことでしかアクセスできなかった。今回、この資料を収集できたことで、当時の陸軍の医療衛生の全般的な状況を確認することができるようになった。これとならんで、バーデン地方の野戦病院の状況をレポートした Karl Willmanns による *Die badischen Lazarette während des Krieges* (1932)の原本も入手でき、本研究プロジェクトが主に調査を行うバーデン地方の野戦病院とバラックについての全般的な状況を知る上での文献資料の基礎を得た。

これらに代表される第一次世界大戦期の医療衛生・野戦病院の刊行資料と並行して、陸海軍が使用していたバラックについての刊行資料も収集した。このバラックは、デンマークのメーカーの製品で特許も取得済みのデッカーバラック(Doecker Baracke)と呼ばれるもので、ザクセン邦(Land)の木造建築会社クリストフ&ウンマックがライセンス販売していたものだった。このバラックが1911年のドレスデン国際衛生博覧会に出展されたときのパンフレットを入手することができた。これには、もともとの軍陣医学的な目的の他に、民間利用も可能な点が記されており、本研究の目的の一つである、軍に関係する科学技術の民間目的への応用の歴史研究とも合致するものである。

未刊行史料の調査については、フライブルク市の3つの文書館(連邦軍文書館、フライブルク市立文書館、フライブルク州立文書館)およびカールスルーエ市のカールスルーエ州立文書館の4か所で行った。

連邦軍文書館では、フライブルク市に設置されたバラック野戦病院、およびベルリンのテンペルホーフに設置されたバラック野戦病院の患者の受け入れ・退院簿(部分的)、元兵士たちが撮影した戦場の写真などを収集した。受け入れ・退院簿には、どのような状態の傷病兵が病院に送られ、どの程度病院に滞在し、医師(または病院)がどのような診断を行ってその傷病兵を退院させたのかといった情報が書かれていた。フライブルク市のそれは皮膚科・性病科に特化していて、梅毒という診断を受けた兵が(どのような根拠かはわからないが)「治った」ないし「(兵士として)任務遂行可能」とされて、戦場に戻ったことが確認される。ベルリンについては、1915年初めから1年ほどの期間だけだが、700人近くの傷病兵についての情報が具体的に記載されており、当時のどのようなケガが多く見られたのか、戦争に特徴的な病気-たとえば戦争神経症-の兵士に対してどのような処置が行われていたのかといったことを垣間見ることが可能な史料である。残念ながら閲覧できたのは1年分のみで、ほかの期間のものは修復中だったので、あらためて調査を行い、テンペルホーフにおける傷病兵の全体像を将来的には描くことが可能だと思われる。

次に、フライブルク市立文書館での調査では、まず、野戦病院についての当時の出版物(Dr. L. Werthmann (1915): *Die Freiburger Lazarette im Völkrieg 1914-1915*), Freiburg i. Br.)によってフライブルクに設置された野戦病院とその建物の状況を調べた。とくに、上記の連邦軍文書館の史料と呼応するように、皮膚科・性病科の野戦病院がバラックによるものであることがわかり、そのバラックが1930年代まで残っていたことも、郷土史の研究からわかった。次に、バラックは野戦病院だけでなく、市内の多くの場所で、軍が物資の保管庫などのために設置していたらしいこと、バラックの設置に関しては、8月初旬の宣戦布告以前より市側で準備を始めており、いざ設置が本格化すると、バラック設置のために必要な業者の手配などが矢継ぎ早に、そしていくらかの混乱とともに行われていたらしいことが史料調査の過程でうかがいしれた。

さらに、この文書館では、大戦が終了した後のバラックの処分についての史料を多く確認することができた。それらからは、すでに既使用・未使用問わず、軍用バラックが格安で売りに出されたり、廃棄処分をされていたこと、さらには戦争直後の住宅難から、民間住宅として転用されていたことなどがうかがわれた。いわば、戦争後の大掛かりな後片付けの顛末が垣間見えたといっても過言ではない。

また、文書館の研究員より、フライブルク大学哲学部歴史学科によって、フライブルク市とその周辺で刊行された新聞がデジタル化され、インターネット上で一般にも開放されていることを教示された。したがって、一次史料だけでなく、新聞史料も利用しながら日本において研究できる。

ところで、第一次大戦時のバラック野戦病院の場所が、現在は閑静な住宅街となっていて、そのようなバラックが建ち、おもに性病や皮膚病の患者が運び込まれていたことは一切想像さえできない状態にあることを確認した。むしろ、何らかの碑も建っていない。

これとは別に、フライブルク市には、第二次世界大戦中に強制労働に従事していた人々が押し込められていたバラックが存在した。この強制労働については、2000年代はじめにフライブルク市他の手で調査が進み、このバラックが存在した場所に碑がたっていて、調査の過程でその場所に行き碑も確認した。第一次と第二次の世界大戦時にフライブルク市に建てられたバラックの歴史、記憶について、その扱いが大きく異なることを確認できた。

フライブルク州立文書館では、1日だけの調査だったが、主に第二次世界大戦中・後のフライブルク市とその周辺のバラック利用についての史料、および19世紀末にデッカー社のバラックが学校などの民間に利用されていたことを示す史料(フライブルク市ではなか

ったが)を確認した。後者については、デュッセルドルフ大学での調査を補強するものと考えてよいだろう。前者については、第一次大戦直後と同様に仮設住宅としての利用が広く見られたことがうかがわれた。いつ頃これらのバラックがなくなったのかについては、さらに収集した史料を精査する必要がある。いずれにしても、無くなったことは確かであり、そしてそのバラック(群)は、フライブルク市の歴史にも記憶にもその場所を持っていない。

カールスルーエ州立公文書館では、旧バーデン大公国領(バーデン地方)における第一次世界大戦期のバラックについての史料を調査した。史料の内容は、フライブルク市と同じ傾向であり、バーデン地方全体でも、フライブルク市と似たような傾向がみられた。ただ、主にドイツ陸軍がどこにバラックを設置していたのかは、正確に記した記録がみあたらないようで、どこに設置していたのかを調査したと思われる史料があり、そこからある程度バラックの様子を知ることができるかもしれない。

これらの調査で入手、今後内容を分析評価することになる史料から、以下のような研究の展望が考えられる。

第一に、19世紀以降のバラック(木造仮設建造物)についての歴史研究はまだないので、その空白を埋めることが期待できる。次に、第一次世界大戦期の野戦病院については、すでに Alina Enzenberger (2021): *Übergangsräume. Deutsche Lazarette im Ersten Weltkrieg*, Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen をはじめとする先行研究があるが、バラックに注目した分析はされておらず、急造せざるをえない野戦病院の建物とその運営がどのようなものだったのかについて、本研究は接近できる可能性がある。さらに、Enzenberger の研究でもあきらかだが、野戦病院は既存の建物を利用することも多かった。したがって、大戦が終われば、その建物は元の用途で再び利用されることになり、大戦前の姿に戻った。しかし、バラックの場合、たいていは解体・撤去され、再利用されたとしても長くは維持されなかった。したがって、大戦が終わって比較的早い時期に、大戦中とは違った風景が現出したと思われる。つまり、バラックが組み込まれた風景 - バラックも構成していた空間 - は、その土地 - たとえばフライブルク市 - の歴史や記憶の空間の中に必ずしもその位置を持っていない。このことは、フライブルク市における第一次大戦中の野戦病院のバラックと、第二次大戦中の強制労働者のためのバラックの歴史・記憶の扱いが異なっていることからもうかがえる。バラックは、地域の空間の中にある程度のボリュームを占めて一定期間存在するため、その期間のその地域の時間の中にその存在を刻印することが可能なはずである。しかし、地域の時間と空間に残された刻印は、必ずしもその地域の歴史や記憶の中に残される刻印とはなっていない。こうしたことは、地域史はもとより、地域における記憶の歴史や地域のアイデンティティの歴史、地域の歴史文化・記憶文化形成の歴史研究に新たな一面を開くことにつながることを期待される。

この研究プロジェクトで問題となるのはバラックが持つ文化的側面だけではない。本研究プロジェクトが重点を置く第一次世界大戦のころのフライブルク市については、すでに Rodger Chikering (2007): *The Great War and Urban Life in Germany. Freiburg 1914-1918*, Cambridge UP が包括的に描いているが、この研究では戦後のフライブルク市の状況については描かれていない。本研究プロジェクトでは、戦時中から戦後への地続きな時間の流れの中で、フライブルク市の状況がどのようになっていたのかを、バラックを通じて明らかにすることが期待できる。フライブルク市の地域史研究に対しても一定の貢献ができるだろう。

さらに、フライブルク市から離れて、バラックそのものについてもこのプロジェクトは研究対象とし、また研究ができることが今回の調査から示唆される。対象時期のドイツ陸海軍が採用していたバラックは、ザクセン邦の木造建築会社が、製造開発元のデンマークの会社とのライセンス契約のもとで製造販売していた。さらに、この会社は、軍用だけではなく、民間目的のためにもこのバラックを販売していた。このことから、バラックという軍用物資をめぐる経済史・経営史の研究への展望が開けてくる。今回は調査できなかったが、この企業の所在地(現在のドイツのザクセン州)は確認できているので、その場所とザクセン州における史料調査、さらにはこのバラックを民間利用していた地域の史料調査を加えることによって、バラックを経済史・経営史的側面からの研究の展望が開けてくるだろう。

今回の助成によって、バラック(木造仮設建造物)についての史料・資料調査という、バラックの歴史研究のための基礎的な研究を行うことができた。これは、上記のような研究への広がりを持つものであり、これまでのドイツ史や西洋史、医学史や、軍事史にはない新しい知見をもたらす研究への道を開くものであるといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------